

松浦 紀典さん 34

サッカーJ1名古屋グラ
ンパスエイトのホペイロ



メモ 三好町在住。家族は妻博美さん(30)。仕事はチームのスケジュール、天候に合わせて不定期。1年ごとに契約更新する。

環境作りで選手を支える

ホペイロとは、ポルトガル語で用具係のこと。「汚い、きつい職場」と言われるそうだが、「ぼくは、楽しんでやっている」とサラリ。球団職員は「ポルトガル語も話せ、外国人選手の信頼も厚い」と評価する。

中学1年からサッカーを始め、山梨・吉田高を卒業するころにはプロ化の話も煮詰まっていた。「自分はまったくのへたくそ」と、時計会社に就職して県リーグでプレー。転職は社会人2年目に訪れた。日本リーグの読売クラブ・トヨタ自動車を観戦したとき、プロのブラジル人ホペイロと顔見知りになった。プロ化を先取りした読売クラブは、国内で初めてプロの用具係を導入していた。



サラリーマン生活は4年。その間、「日本人ホペイロを育てるのが夢。一緒にやろう」と誘われた。「保証はないし、悩んだけど後悔したくなかった」と、1993年、東京ヴェルディ(当時ヴェルディ川崎)と契約。10年間の経験を積み、グランパスに移って3年目になる。

選手がゲームに集中できる環境作りには欠かせない存在。最も重要なスパイクは、一人で約35人分も磨く。硬めがいいのか、柔らかいのがはやいのか、選手個々の好みも把握しておく必要がある。ただ、名古屋では、まだ優勝を味わっていない。「今年の天皇杯で優勝して欲しい」。目に見えない苦勞が報われるのは、チームが頂点に立ったときだ。(一円正美)